

## 趣旨説明

高校から大学、そして社会へとつながる「学び」を育てる  
~高校生・大学生のキャリア形成 発達の視点から~

長谷川 豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）



（スライド1）ただいまご紹介にあずかりました、京都府立大学の長谷川です。第22回を迎えます高大連携教育フォーラムの趣旨について、説明させていただきます。

先ほど、会長から今回のテーマについて丁寧に触れていただきました。なぜこのテーマにしたのかですが、本フォーラムも22回目を迎え、高大だけではなく高大社の連携の取り組みも、今後一層必要になってくるのではないかと考えました。次の展開にむけて皆さま方と共に考えていくといった趣旨で、このようなテーマを掲げました。

（スライド2,3）少し踏み込んでお話しします。高大接続改革の中央教育審議会答申が出て今年で10年目になります。新カリキュラムに基づく大学入学共通テストが今度の1月に実施されるなど、転換点を迎えています。約10年の間に、非常に様々なことがあったのではないのでしょうか。急速に展開している中で、改めて高大接続改革について考えるとともに、さらにその次を見通すべく、本フォーラムでは足を踏み出すことにしました。

（スライド4）第4期教育振興基本計画では、持続可能な社会の作り手の育成、そして日本社会に根差したウェルビーイングの向上、の大きく2つのコンセプトを掲げています。

（スライド5）個人と社会、個人と高校、大学、そして社会へとつなげて考えていくことがより大事になってきています。個人のウェルビーイングだけではなく、学校や地域社会を含めウェルビーイングをどのように考え、向上させていくのが基本計画の大きなコンセプトになっています。

（スライド6,7）基本計画の中では、日本社会に根差したウェルビーイングと銘打っています。さらに、主観的ウェルビーイングというキーワードも盛り込まれています。

個人がどのように、今ある環境や自分自身の今の到達点、これからの学びを考えることができるのか、それを主観的に、ポジティブに捉えていくことができるかが重要なのでしょうか。

（スライド8）この基本計画の中では、子ども、若者、学校、家庭、地域、社会、また学校では教師を含めたウェルビーイングが強調されています。

（スライド9）では、子どもたちの状況は一体どうなのか。NHK放送文化研究所が長年にわたって子どもたちの生活と意識調査に取り組んでいますが、スライドはそれをグラフ化したものです。

「あなたは、今、自分を幸せだと思っています

か?」という質問で、高校生だけを取り出すと、それほど大きくは変わっていないように見えます。一方「あまり幸せではない」「まったく幸せではない」という高校生が以前に比べると多くなっています。同一人物ではないので単純比較はできません。

(スライド10,11)また、自身の「生き方」について「がんばるか楽しむか」では、最近「人生を楽しむ」傾向が高いようです。

(スライド12)日本財団も18歳の青年に対し「夢を持っているか」などの意識調査を行い、国際比較をしています(2019年と2024年)。「将来の夢を持っているか」、「自分で国や社会を変えられると思うか」との質問に対して、日本の青年は「はい」と回答した割合が他国に比べて低く、ニュースでも話題になりました。日本の18歳の意識は、全体的に肯定的ではないと受け止められています。

(スライド13)日本財団は今年も調査を実施しています。同じ調査ではないものの、いくつか共通する項目があります。その一つ「将来の夢を持っているか」という設問では、対象が違っているにも関わらず、前(2019年)の調査とまったく同じ数値となっています。

(スライド14)また、「自分で国や社会を変えられると思う」という設問では、日本は2019年よりは上がっているものの、(他国に比べて)低い数値です。

自分と社会との関係について、このような青年の意識をどのように受け止めるかを考えておく必要があります。

(スライド15)ウェルビーイングは幸福度と訳されたり、幸福感と言われたりします。日本の高校生の感覚としては、「どのような国になってほしいか」といった設問に対し、「国民の幸福度が高い国」という回答が「平和な国」に次いで高いようです。「平和な国」は多くの国で高い傾向です。

日本の18歳にとって、幸福な国であることを

求めているけれども「教育水準が高い国」があまり高くないのは、後者はもう達成できていると感じるものの、前者は達成できていないということなのかもしれません。

(スライド16)コロナ禍にあつて、子どもたちが学校との関係をどう感じているか(「学校への所属感」という調査がOECD加盟国で行われました。OECDでは、「学校への所属感」が教育におけるウェルビーイングの指標の一つにされていますが、この数値が日本は大変上がりました。コロナ禍で、学校の存在が子どもたちにとって大きかった、日本の学校教育は大変努力をし他国に比べて成果を上げたと言われます。

とはいっても、すべての子どもがそういうふうになっているわけではありません。

(スライド17)日本の18歳の感覚では、「学校で勉強する意味」は「将来の所得が高くなる」という点は他国に比べて少し低いのですが、「勉強することが義務だから」という捉え方は他国よりも高くなっており、学校での勉強は義務的なものにとらえられる傾向にあるようです。

そして、日本の18歳は仕事を選ぶ上で「楽しいかどうか」を重視するようです。仕事「楽しいかどうか」は他国ではかなり下位の項目なのですが。

あと、「人生において大切にしたい」項目のトップは、他の国の18歳だと「家族」なのですが、日本の18歳は「自身の好きなことややりたいこと・趣味」です。

(スライド18)こうした青年の意識をどう見るのか。高校生自身が学んでいることと社会とのつながりをどのように考えているかを踏まえながら、キャリア教育も含めて高大社の連携に取り組んでいく必要があります。

(スライド19)高校生たち自身が今いる学校から大学へ、さらには社会とつながる見通しであったり、将来展望をしつかり持ち合わせるのかどうかを意識しながら、高校や大学での日々の教育が大事だと考えます。日々の取り組みの

中で、より良い学校づくりや社会づくりにつながっていくと、高校生たち、青年たちが経験する、体感することが重要になっているのではないのでしょうか。

(スライド20～22)このような点を踏まえて、キャリア形成、キャリア発達と関連づけていければと考えます。この間の中教審答申で触れている点、急ぎますがスライドを斜め見していただき、イメージを持っていただければと思います。

(スライド23～26)つい最近、大学関連の中教審答申の素案が出ましたが、その中に「高等学校段階までに培われた資質・能力を高等教育においてどのように伸ばしていくかという高大接続の悦点から高等教育段階における学修の在り方を再構築していく必要があ」と記述されています。

この高大接続に留まらず、さらにその先を見通すことが、より大事になってきています。求める資質・能力については大学と社会とのずれ(相違)があることから、対話を通じて克服していくことも重要な課題になっています。

(スライド27～28)会長の挨拶にもございましたが、2040年、2050年を見通すと大幅な人口減という状況があり、高校、大学をどのようにつくっていくのかが問われます。こうした社会状況を見通しながら、高大社の連携・接続を考えていきたいと思えます。

今日は2つの基調講演と指定討論、2部では5つの分科会、夜には情報交換会を設けています。皆さま、今日一日お互いしっかりと学び合って、元気になって、来週からの取り組みにつなげていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

スライド 1

**第22回 高大連携教育フォーラム**

**高校から大学、そして社会へとつながる  
「学び」を育てる**  
～高校生・大学生のキャリア形成・発達の視点から～

趣旨説明

京都高大連携研究協議会  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室  
長谷川 豊(京都府立大学)

スライド 2

本フォーラム趣旨①

●中央教育審議会のいわゆる「高大接続改革」答申から10年を迎える。この間、高校では改訂された学習指導要領に基づく授業が今年度からすべての学年で実施されている。2021年から開始した大学入学共通テストは、2025年からは新課程における「主体的・対話的で深い学び」とおして身に付けた力を問うとされる。

スライド 3

「高大接続改革」=三位一体の改革

2012 文科大臣諮問  
2014 中教審答申  
2015 高大接続改革実行プラン  
2016 高大接続システム改革会議「最終報告」  
2021 大学入学共通テスト開始  
2022 高校新課程授業開始

- 国際化、デジタルの急速な進展  
社会経済の激変に、かつ大きく要求。
- 知識習得だけでなく、深い理解を形成していく力を育てることが必要。
- 社会の急変に、対応していくために必要な「学びの改革」をバランスタイプに必要。

【学びの改革】

- ① 知識・技能の確実な習得
- ② 「自らを基にした」
- ③ 思考力、判断力、表現力
- ④ 主体的を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

スライド 4

本フォーラム趣旨②

●他方、コロナ・パンデミックや国際情勢の不安定化、生成AIの登場などにより未来予測がますます困難となり、少子化や格差拡大など課題が山積する下で、第4次教育振興基本計画は策定された。同計画は「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」をコンセプトとして掲げている。

スライド 5

「第4期教育振興基本計画」(2023~2027年度)の2つのコンセプト [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/](https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/)

1. 持続可能な社会の創り手の育成
2. 日本社会に根差したウェルビーイングの向上

- ・ 多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングを向上
- ・ 幸福感、学校や地域でのつながり、協働性、利他性、多様性への理解、社会貢献意識、自己肯定感、自己実現等を調和的・一体的に育む

➢ ウェルビーイングとは身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。

スライド 6

日本社会に根差した「調和と協調(Balance and Harmony)」に基づくウェルビーイングを教育を通じて向上させていく

個人が獲得・達成する能力や状態に基づくウェルビーイング (獲得的要素)

- ・ 自己肯定感
- ・ 自己実現 など

人とのつながり・関係性に基づくウェルビーイング (協調的要素)

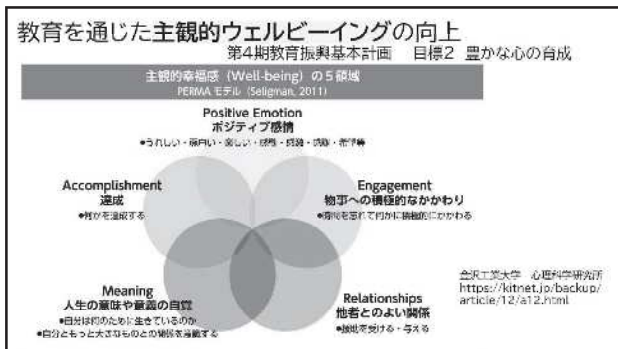
- ・ 利他性
- ・ 協働性
- ・ 社会貢献意識 など

両者を調和ある形で一体的に向上させていくことが重要

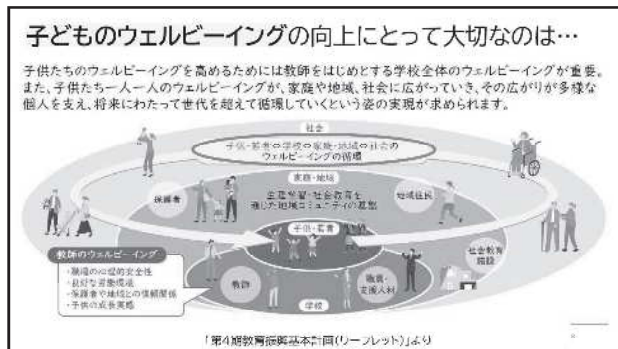
「第4期教育振興基本計画(リーフレット)」より



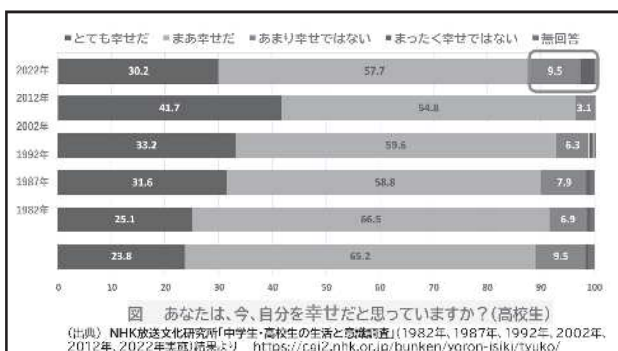
スライド 7



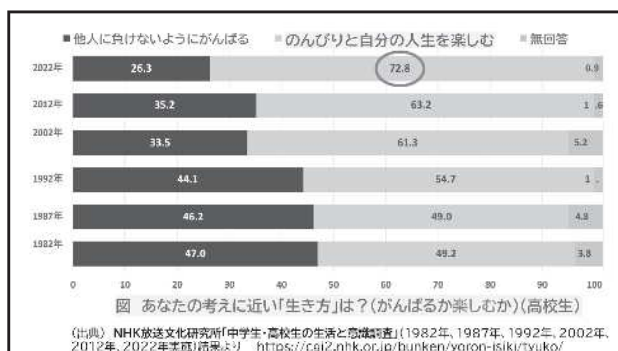
スライド 8



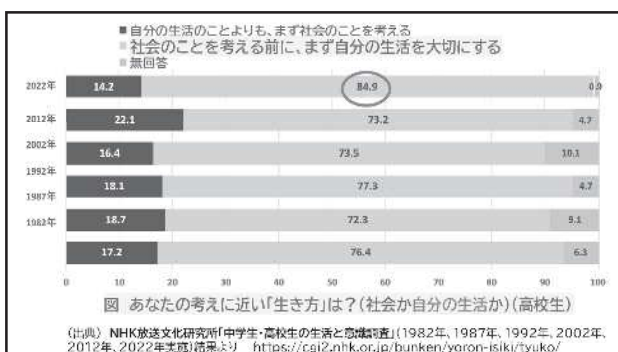
スライド 9



スライド 10



スライド 11

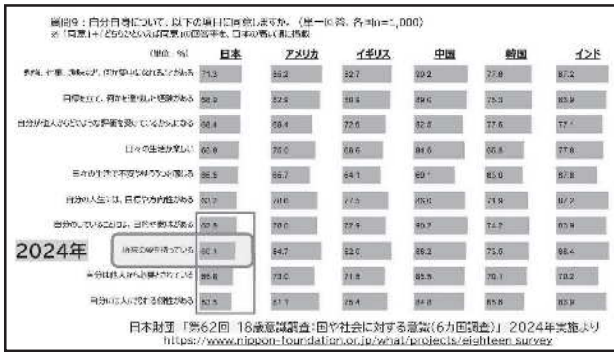


スライド 12

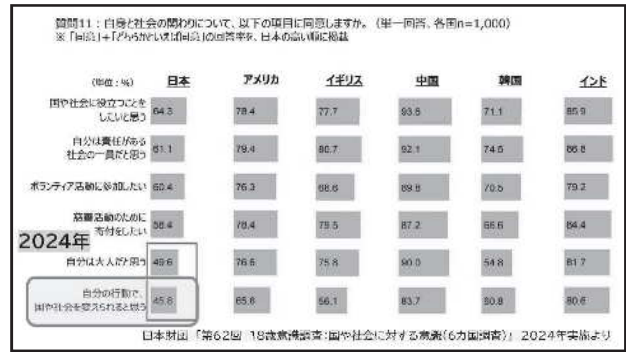
Q1 あなた自身について、お答えください。(各質問=1000) 日本財団「第20回 18歳意識調査(社会や国に対する意識調査)」(9カ国調査) 2019年実施より

2019年	性別を本人で決める	結婚や出産は責任や義務ではない	同性のパートナーを持つ	同性で暮らす	同性のパートナーを持つ権利がある	同性のパートナーを持つ権利がない
男女	37.0%	52.0%	50.1%	31.4%	66.8%	27.2%
10代	34.1%	52.0%	45.8%	23.8%	64.1%	31.0%
10代前半	29.8%	51.9%	47.8%	21.8%	71.8%	28.1%
10代後半	38.4%	52.1%	43.6%	25.0%	60.5%	35.5%
10代前半	25.1%	51.8%	42.4%	17.8%	75.9%	23.5%
10代後半	43.1%	52.2%	43.8%	25.0%	57.7%	32.3%
10代後半	48.2%	51.9%	40.8%	24.2%	50.8%	34.0%
10代後半	51.1%	51.8%	37.2%	21.8%	47.4%	31.8%
10代後半	52.6%	51.4%	32.4%	18.8%	41.2%	28.1%

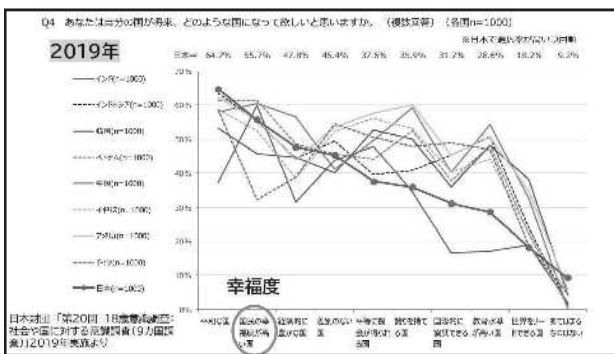
スライド 13



スライド 14



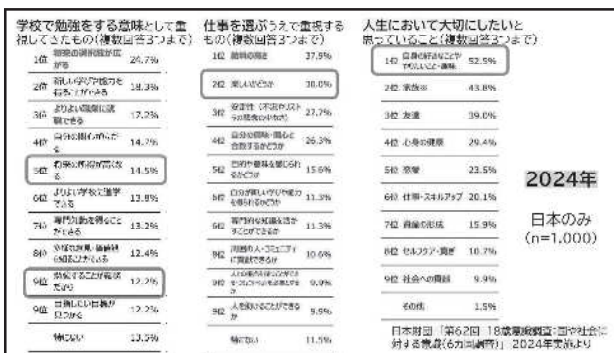
スライド 15



スライド 16



スライド 17



スライド 18

本フォーラム趣旨③

●いまここで学ぶことと自己と社会の将来とのつながりを意識しながら、生きる基盤となる資質・能力を身に付け、自分らしい生き方をよりよい社会づくりとともに実現していくという、子ども・若者のキャリア形成・発達が求められている。

スライド 19

本フォーラム趣旨④

- 今回のフォーラムでは、探究をととした「学び」が高等学校から大学、社会へと向かう一人一人のキャリア形成とどのようにつながるのか、加えてこの「学び」の経験の往還を通じたよりよい学校づくり・社会づくりのあり方を探る。

スライド 20

子どもの学びの姿として。。

○幼児教育から小学校、中学校、高等学校、大学・社会といった段階を通じ、一貫して、自らの将来を見通し、社会の変化を踏まえながら、自己のキャリア形成と関連付けて学び続けている。

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 2021年1月  
3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿  
⑤各学校段階を通じた学び p.21

スライド 21

第I部 総論

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿 pp.17-18

- ・全ての子どもに基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子どもにより重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を表現することや、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。
- ・基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通しての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。
- ・以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 2021年1月

スライド 22

第II部 各論

3. 新時代に対応した高等学校教育等の在り方について p.50

- さらに、高校教育を取り巻く状況を見ると、産業構造や社会システムが「非連続的」とも言えるほどに急激に変化しており、少子化の進行によって、高等学校としての教育的機能の維持が困難となっている地域・学校も生じているなど社会経済の有り様を踏まえた高等学校の在り方の検討が必要である。高等学校は初等中等教育段階最後の教育機関として、高等教育機関や実社会との接続機能を果たすことが求められており、また、進学適性年齢や成年年齢が18歳に引き下げられることを踏まえ、生徒が高等学校在学中に主権者の一人としての自覚を深めていくための学びが求められている。このため、高等学校においては、社会経済の変化を踏まえながら、自己のキャリア形成と関連付けて生涯にわたって学び続けていけるよう、2.(2)①で述べた義務教育段階での取組をより発展させる形で、学びに向かう力の育成やキャリア教育の充実を図ることが必要である。

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 2021年1月

スライド 23

大学と高校、産業界、地域社会との連携・接続。。

⑧高等教育機関を取り巻く環境・組織との接続の強化

ア. 初等中等教育との接続の強化

- 初等中等教育段階においては、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱をバランス良く育成することを目指すとともに、高等学校での「総合的な探究の時間」や「理数探究」等における問題発見・課題解決的な学習活動の充実が図られるなどの教育内容の変化や、1人1台端末の導入による新たな教育手法の展開等、高等教育機関へ進学する生徒の学びに変化がみられる。
- そのような中、高等学校段階までに培われた資質・能力を高等教育においてどのように伸ばしていくかという高大接続の視点から高等教育段階における学修の在り方を再構築していく必要があり、初等中等教育段階における多様な学びに対応した大学入学者選抜の改善を促進するなど、初等中等教育と高等教育との接続の強化を図ることが重要である。

中央教育審議会「高等教育の在り方に関する特別委員会「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について」(答申(草案)) 2024年11月12日

スライド 24

- また、初等中等教育段階の学校と高等教育機関との連携の下、実際に高等教育機関で扱われている研究テーマについて、課題の発見や仮説の設定、それらを裏付ける実験や調査の組み立て方、一連の課題解決のプロセスをレポートにまとめ発表する方法等を大学教員等が児童生徒に指導するプログラムもあるが、こうした取組は、研究の魅力を伝え、より適切な進路選択に資するだけでなく、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を総合的に伸ばす観点からも有効である。

イ. 社会との接続及び連携の強化

- 大卒に求められる資質と技能の国際比較調査によれば、大学で取得することが期待されるコンピテンスの認識について、大学教員は、理論的思考や分析力、知識適用力や問題特定・解決力等の技能的コンピテンスが必要と考える一方で、企業は対人関係や自己管理能力及び協調性等の資質的なコンピテンスを重視するという相違がある。

中央教育審議会「高等教育の在り方に関する特別委員会「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について」(答申(草案)) 2024年11月12日



スライド 25

ウ、地域社会の持続的な発展への貢献

- …高等教育機関が**地域の中核的な拠点**となっていくためには、地域の発展のために貢献するとともに、**地方公共団体、産業界、金融機関等、地域の様々なステークホルダーも一体となって** 取組を進めていく**両者の関係の構築**が必要不可欠である。…
- …地域の高等教育機関を核とする**地域活性化や人材育成**を図ることは、我が国の多様な文化を生かした**多様な教育研究の場**を形成することにつながり、日本全国や世界各国から優秀な学生が集まることが期待される。多様な文化的背景を持つ学生がキャンパスで過ごす中で、その高等教育機関を育んだ**地域の魅力**を知るとともに、**人的ネットワーク**を形成することで、その地域への**愛着や誇り**が醸成され、卒業後も地域に関わり続けるようになるという**好循環**が生まれることも考えられる。魅力ある地域の高等教育機関の存在が、地方に在住する進学希望者にとっての**学びの場**となっていくことが期待される。

中央教育審議会「高等教育の在り方に関する特別部会「急速な少子化が進行する中で、将来社会を見据えた高等教育の在り方について」(最終草案1) 2024年11月12日

スライド 26

**キャリア形成にとって学ぶことの意義や価値の理解**

- ・自分の将来における生き方や進路を模索し、大人の社会でどう生きていくかという課題に出会う時期である高等学校段階においては、**自らの将来のキャリア形成を自ら考えさせ、選択させることが重要**になる。また、高校生にとって、小学校・中学校での学びを基礎としながら、**高等学校卒業以降の教育や職業、生涯にわたる学習とのつながりを見通すことは極めて重要**であり、全ての教育活動を通して「**学ぶことの意義**」や「**学ぶことの価値**」を知らせることは不可欠であると言えよう。**現在の学習と「大人の世界(=未来の私の世界)」との接点を発見**する場でもある就業体験活動(インターンシップ)は、**新たな学習課題や自分の未熟さ(=発展・成長の可能性)の気づき**にもつながる貴重な機会となる。

文科省「『中・高専学校キャリア教育の手引き(中学校・高等学校)』(平成29年30年告示)第1号(2023年3月) p.88  
https://www.mext.go.jp/e\_menu/shotou/currcul/detail/mext\_00010.html

スライド 27

**本フォーラム趣旨⑤**

- 高校生・大学生が自らの在り方生き方を考え、**興味・関心のあることを見出し探究するなかで、そのキャリア形成・発達の促進、支援等における課題**について、高校、大学、社会の当事者がともに考える機会とする。

《第22回 メインテーマ》

- 高校から大学、そして社会へとつながる「**学び**」を育てる  
～高校生・大学生のキャリア形成・発達の視点から～

スライド 28

本日は、

**第1部 2つの基調講演&指定討論**

**第2部 5つの分科会**

そして、、、**情報交換会**

ご清聴ありがとうございました